三世無生經

清參

王弘

月有浮雲花有
風人間逆旅百年
中試開道眼觀
真諦方自清光

花自紅

古故大成數管長平山省齋

贈月之幸翁詩

戊戌暮春　男戊信謹錄

序

山之高水之深芊芊而禽鳴月白而風清包容乾間萬象于十七字中者能句是也蓋情之至者其言也簡故理精於中所以動天地感鬼神也

豈可陋俗視之乎素水小野
翁夙善佛旬留名於神道教
職久矣頃者其孫龜吉將刻
遺稿屬一言於余余聞龔氏
喜浮屠之教句句合禪理翁
則反之而其所位時或有如
闡發幽玄窺其底蘊者不知
研精於斯道自得冥冥之間
而致其然歟丁酉之春翁自
題名字于其墓石別署明治
三十年没時年八十有五十
二字而以其年十二月終嗚

呼豈平偉哉

明治三十一年五月

五峯居士寛撰并書

病急かしわれば
とりつまもあるる
月の半ばは物思を
きくらもあるわけ
ばかりなるかな

雲仏沙門星亭

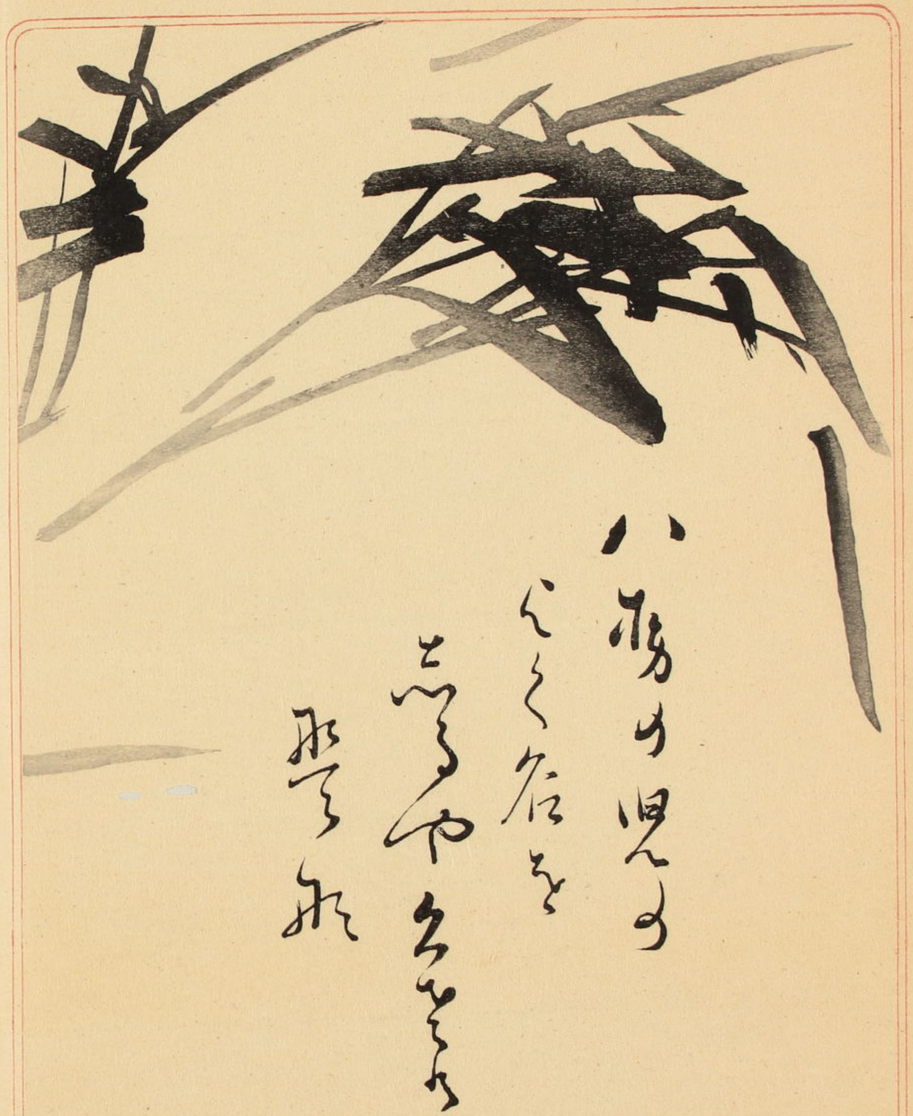
なみ〳〵つまの事

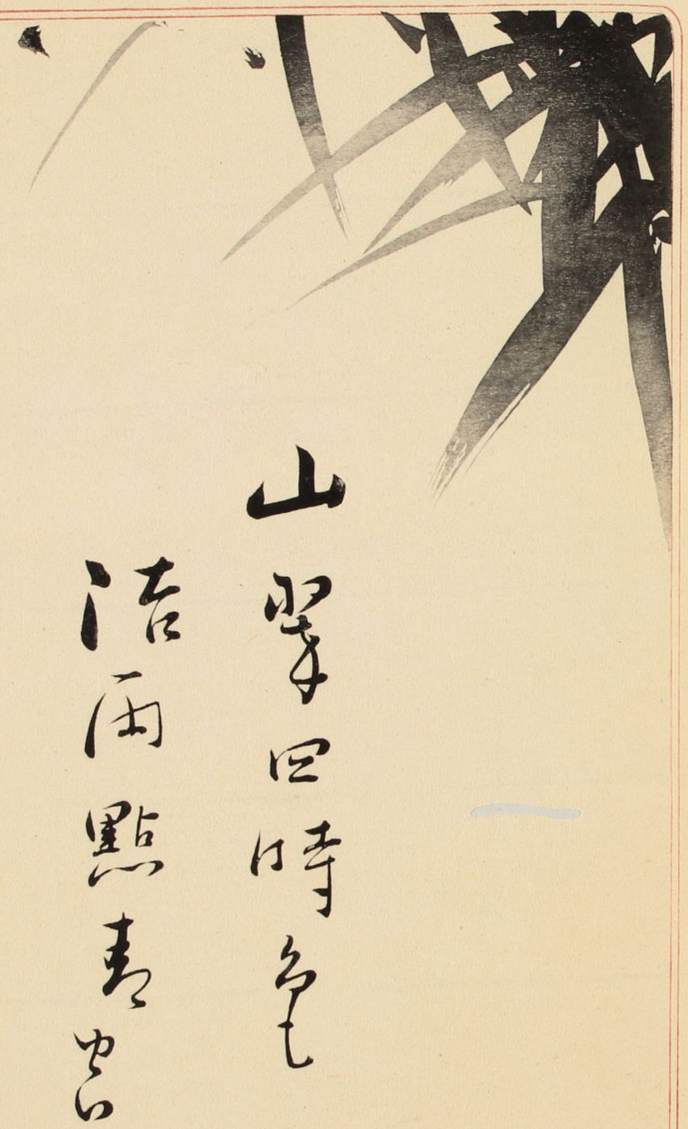
雲仙清絶星霜
なつみさつ年華

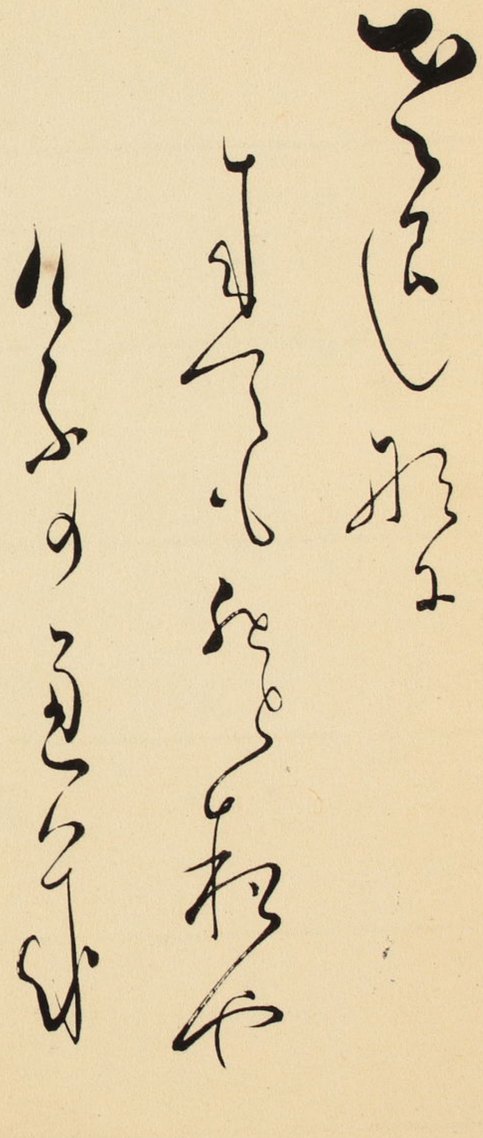
春汀

尺八匠宗次郎翁肖像

然谷稿飯塚写




山翠如時氣
沽雨點青空



小野素水翁傳

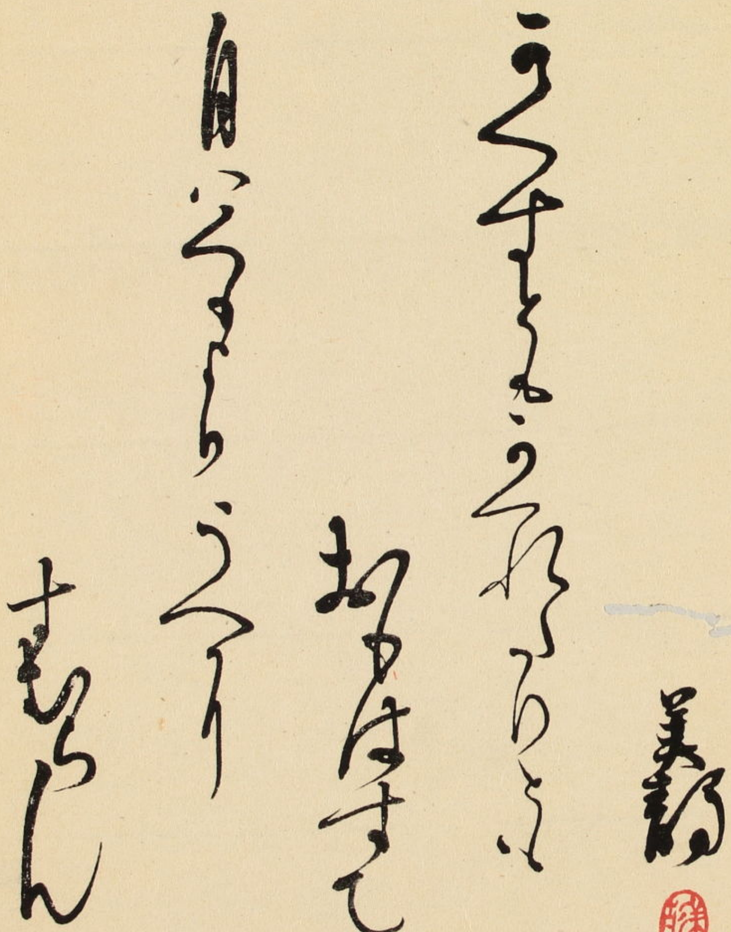
小野翁諱ハ慶孝。通稱又右衛門。小字學三。黒元舍素水ハ其號。本姓宇治氏。信州上伊那郡小野村ノ人。考通稱喜代ハ。姚古廐氏。翁ハ其第二子ナリ。年十九。同村矢彦神社ノ神職。小野賴母君ノ養フ所トナリ。因テ其氏ヲ冐シ。其職ヲ襲ク。天保九年。家ヲ甥備前ニ讓リ。遠ク江都ニ來リ。書法ヲ松本董齋ニ學ヒ。咸齋ト号シ。後。董山明義ト改ム。經ヲ龜田綾瀨ニ學ヒ。歌ハ千葉葛野ニ學フ。而レモ翁ノ志。俳諧ニ在リ。竟ニ斯道ヲ以テ名ヲ成サント欲

ス。初。小簑庵碓嶺ニ從ヒ。後。孤山堂卓郎ニ從フ。卓郎没シテ後。贄ヲ月之本宗匠為山ノ門ニ入レ。研磨剖靡スル一多年。遂ニ其玄奥ニ達ス。明治七年四月。教林盟社ヲ起スニ及テ。為山ト力ヲ協セ。盡スニ財ト職トヲ以テス。幾クモナクシテ為山没ス。十二年五月。二條基弘公ノ台命ヲ受ケ。月之本宗匠ト稱ス。已ニシテ教職ニ列シ。十九年五月。遂ニ教林盟社社長ニ推薦セラレ。三十年十二月。大教正ニ累進ス。翁ハ文化十一年正月十四日ヲ以テ生レ。明治三十年十二月二十一日ヲ以テ歿ス。

享年八十五。谷中ノ殯苑ニ葬ル。配。針ヶ谷氏。一女ヲ生ム。夭ス。其兄ノ女ヲ以テ嗣トナシ。又。井上氏ノ子亀吉ヲ養ヒ。其嗣ヲ承ケシム。翁。人ト為リ。温厚寡言。其人ニ接スルヤ。一ニ誠實ヲ以テセサルナシ。曩キニ町民ノ推ス所トナリ。町政ニ關シ。孜々トシテ克ク其職ヲ盡ス。是ヲ以テ人皆倚頼セサルナシ。後。居ヲ吳服丁ニトシ。典物ノ業ヲ開ク。然レ𪜈。翁。心ヲ風月ニ寄セ。文雅ヲ崇尚ス。其台命ヲ受ケ。月之本宗匠トナリ。祝筵ヲ淺草井生村樓ニ張ルヤ。寄贈ノ賀詞。數十百。來會スルモノ。亡慮

數百人。盛ナリト謂フヘシ。翁ノ名聲隆起スルニ
及テ四方ノ人来リ。或ハ郵致シテ評點ヲ乞フモ
ノ益多ク。累々積テ堆ヲ為ス。翁。酒ヲ嗜マス。端然
トシテ几ニ對シ。朱筆ヲ把リ。半夜ニ至テ。且ハ止
マス。人或ハ其年高ク過勞ノ甚キヲ以テ。之ニ節
養ヲ勸ムルアルモ。肯セスシテ曰ク。吾。寧ロ之ヲ
樂メリ。勞苦ヲ覺ヘサルナリト。好テ大字ヲ書ス。
其大ナル方一丈。其小ナルモ亦數尺ニ下ラス。尤
モ神社ノ幟ヲ喜ヒ。其揮フ所ノ布。廣サ五反。若ク
ハ七反ニ及フ。筆鋒奇逸。鴻飛獸駭。鸞舞鳳翥ノ姿。
人ヲシテ一見驚然タラシム。老後。竹ヲ描ク。墨痕
疎淡。妙ニ風趣アリ。蓋亦自家悟得ノ一技ナリ。翁。
毎々人ニ語テ曰。我。人烟稠盛ノ地ニ家シ。六十餘
年ノ間。一モ祝融ノ怒ニ觸レス。予ニ素水ノ歸ア
ル。豈ニ偶然ナランヤト。平生紀述スヘキモノ少
シトセス。今纔ニ其一二ヲ擧ク。若シ夫レ翁ノ俳
諧ニ於ケル。世。固ヨリ定論アリ。敢テ之ヲ贅セス。

玉壽


美翁

行年七十四
光峨

つれの根人国出でき 幸太郎
花の名は 花の名は 花の名付け
嬉しうるる 先花せよ 花衣 始
ようよう 生きて 奇せ 生きて
きず 歌の あくて 国出でて 引 始
山 蔦 花 田 名 名 第 小 初
上 里 うら 長 中 都 の 初 義

雪面梅の つぼみより まもれる花
立つ雲の 間より 鶯の 鳴くを聞
烟村の 雪餅 ねりて 山鳥
手ぶくせ せもおりて 接木ぶ
我為に 食物 ひろ 清
清雪や 山に降 ぶる
昔の雪 ぶ 雪 ぶ
永日や 清明 酒の 回 ぶ

春雨 ぶ 持て 暮日 ぶ 黒木 屋
巷雪 ぶ 新い 人の 多い こと
清光 の 春 ぶ 春 ぶ 焼 梯
屠 ぶ ぶ 寸 春晴 の 春 は 和
雪 ぶ 春 ぶ 尽 ぶ 雪 の 雪
修 ぶ 山 ぶ 本 姫 ぶ 夏 隣

仁徳上皇 ぶ 菊 菊 て

我 ぶ 山 ぶ 雪 ぶ 清代 の 春

[illegible]の久し作妹

[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]

又

[illegible]の白ひや[illegible]

[illegible]屋の小女[illegible]つく

[illegible]の国[illegible]物[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]ハ[illegible]

いと[illegible]

[illegible]の[illegible]待[illegible]一[illegible]

畑村や麦の秋の風[illegible]吹

すゝしさや角[illegible]遠[illegible]波[illegible]

豆[illegible]や[illegible]の[illegible]

[illegible]耕[illegible]

[illegible]の[illegible]

蕎の細道の旅や出羽へ

秋

多くれい霧に明るし星月夜

掃き捨てし跡の塵や百二日

招うねと多まる山路や雨垂

跡を蚊の関まで送りて見送りて

鮎魚や咲かれて鮒の内

涼のあきまる蕎麦酒うれし

霧の海海より深くうみうえ

山川や茨菰掘る若者引き

翌日の鮒を買ふて稲雀

金山日も暮れの夜情を居の風呂

昼ふうとき蛍蛍の尾や虫屋

間を漁る山川や明川廉

深山まで恵ふ者あり柴蕎

打ち屋に禁ぜうの萩寝うれ

[illegible]樂寺の[illegible]井や清紅葉

冬

[illegible]雨の明日[illegible]降て初しぐれ

初冬や熟[illegible]五味[illegible]

[illegible]や冬田の[illegible]の[illegible]

玉あられつのらぬ[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]萩や角の[illegible]戸の[illegible]

[illegible]

[illegible]角の[illegible]

[illegible]鍋[illegible]の[illegible]

[illegible]出せ[illegible]海義[illegible]

我家さへ[illegible]

[illegible]の[illegible]

山中[illegible]

炭焼の[illegible]角の[illegible]

[illegible]の[illegible]

あつうき梅や時雨の雨やとり

檀大義西を相命して

恋の夢ふうくたち焼く香玉梅

きをまつ人たる者の香霧

東方

水の源をたづねる者

孤

橘仙

菜の花は自ら春を溪出て

市丈

不自由きつ寸の長所

菊道

陸文子秋い月秋の多うり

宇山

好きまきつ世て日高菊

芽翠

呼び出し文字の読み仮名一覧

一　壽春　清雅　白梅　仲春　探春　桃花　松風

舊義の類のちがいを考へ
新に甲製あり此はうるはしく
正直者の　はなはだ　婦　而
夕涼の　なるあつさこのまさに
ちつる　奴　新　清き　自
かつ　筋　往　所　中　さう　春
意く用ちいあり　よよ　こと

古風　帳　格　丈　逸
完　あつ　百　境　庭　雨
古　八　重　越　つ　春　永
義　中　こう　蝶　こう　仲　杖
佛　時　新　あつ　汐　干　素　琴
き　の　ひて　さ　寸　苔　竹　孫
中　合　羽　袋　こう　投　出　当　古
穂　あ　れ　い　世　義　居　寸　英　波

[illegible]　碧海
[illegible]　里載
[illegible]　自蓑
[illegible]　福田
[illegible]　宗悟
[illegible]　莊敬
[illegible]　云石

[illegible]　西方
[illegible]　寿兆
[illegible]　聲遥
[illegible]　一也
[illegible]　梅年
[illegible]　梅古

京都

八十四

稲荷

極楽

秋夕

陸奥

大坂

小夜

法善

陸奥守俊兼の家にて雪の里　南敦

時の雨の軒の風の吹たるに　十名

面影のいつかたるに天の川　波弱

笛紅の袖いてあるに桔梗　義西

夏川や月のうつる時雨宮　仙蟾

淋しさや寺に入る鐘の音　文仙

庄屋よりの成る萩の寺　義蟾

播州

すれあつて二筋もつる相一筋　笠雅

きのふまで漆ぬる初氷　筑花

古殿や踏ぬ萩ぬる枕もと　三粒

同時

雪消て神のしるる年こうの鳥　機分

月雪の蒲束冠せん成る山　太尾

秋の初ふる時いかのこのうの　長樂

春の雨さしの日の柳の成る　梅年

川吉の時雨より仰ぐもちの葉　　伯耆

除夜の鐘ゆくり耳の完かしこ　　京左

浜ちどりの群りて寒の月　　唐渓

出雲

雪解や桃咲きの赤きのみ　　妙川

蕨しぼる生徒や　枯尾花　　蕨洲

備後

十

東うれしいちまき庭や牡丹　　不如帰

しらゝや太閤の蔵つゝ二号室　　吉海

伊豫

用の為に人を重ねて冬籠　　葉暁

ちりぬくり蕨り孫して冬牡丹　　古兎

防州

更衣て芦ヶ江の青さ　　菖渓

紀伊

原野や自ら靜かうなる秋　嵯圓

新しき人見ぬ秋のくれ　松年

備前

せくるふ種先引くも芒うれ　鶴彩

備後

折口の仮初ぬ梅ぬ　相蓋

赤蓋

神殿や都の上ゝきつゝ　西池

きやの宣のうゝ者や秋日和　蕉雨

園芳

きうの西も中ゝまの小素ぬ　鈍考

新しき新ゝきを立ゝ排ひ　鯉一

筑後

蝶の鬢のうゝ秋の空きうれ　香素

豊前

水ゝ流ゝ出ゝ立ゝ雪佛　曉帝

人を待ち侘び顔なる菜の花　暁翠

西へ入る月の影しをの角　梅青

薩摩

仰ぎ見る赤の思ひや鄙の角　白圭

清水天津

亡親の心ぞ千や初時雨　薛水

宋忠兵港

うぶ毛なる今日の初時雨　峰翠

行人の袖ふるや初しぐれ　飯袋

時雨ふる鐘の音　風来坊

いつ迄降る高れと初時雨　付先

涙むるの袖よ時雨て親の墳　巻山

袖ぬらす人の袖　泥郎

引汐のくもりて夕時雨　蘿山

小落を後志

反古屑に親よりて至鄙　墨面

雲つゝむ中光さゝいとゝへやら　財孔
拂ひ分りの蔭は寸〻拂ひ　子牌
世を易し景は冬の寒ゆき　素文
四方山は嶺しく秋空うゝ　林史
大根は葉よ赤あり名飛蝶　鮮一
赤蟹の爲りはうけて冬牡丹　小鯉
名ゐいよ雪の峯こよ雪の　不爭
うゝれ切夢あつうや雪の月　吾表

上席の吟きし世俗の寒さこゝ丸　夢雪
俳や年の名残の名残の丹前　冠葉
自義で吟よ〻〻湖一柏樹原　懷湖
子代ものてこゝ名ものを年名残　素峰
ちゝれ切ゝ名残へちる紅葉　不伸
世の夢を拂ふ箱や年の暮　可笑
夢の中ゝ夢枯れ枯れ寒さ　春角
孫ゝ〻寸寸年の〻多一年の果　花月

山茶花のちりて庭もくらかるし　面白

常盤木も枯るゝ風に霧ぶ　豊志

行かうと思ふ内に年の市　一翠

菅笠の白ひを手の冬ゆふれ　庶井

冬枯や老木にさへる蕊の見え寸　一得

行人の見あるく志ふ雪ふる所　如雲

日言

鶴振

十四

石鼎

雪の蕊の黄の白ひやちる時面　池菱

雪白花ちるつゝみるおりふれ　江雪

紫波

鳴ちの白ひたりて月の霜　秋子

羽後

きぬ〳〵の折ふり出よ搗く杵の音　峰風

東内老い西へうれぬ雪の宮　以孝

[illegible]塚の夕ぐれ　自靜
[illegible]の[illegible]ん雪の道　壽我
初冬の[illegible]かたぶく嶽の雲　花自
[illegible]れ蛙の[illegible]　葉雨

明前

[illegible]の水[illegible]　蓬秀
葉の[illegible]　[illegible]旭
水仙の[illegible]机　[illegible]自

亡き友の[illegible]一[illegible]仏　清[illegible]
雲[illegible]　[illegible]松
[illegible]　自[illegible]
自然の[illegible]　[illegible]
又[illegible]の下[illegible]の雲　頑田
人[illegible]の[illegible]　[illegible]水
清[illegible]　[illegible]外
の[illegible]　[illegible]川

蕗の薹咲きそめて梅古し　青扇

梅樹繁りし庵も変りけり　雲牛

埋火の消ぬしづかの男忌　嘯石

一時雨濡しきぬ新米の月の下　九風

自然薯よりきりたる餅の重　一眺

人さうで変りたおりの月見うの会　一閑

淋しかりし静かの家宴や春の月　甘水

陸中

如月ろく陸奥にある時四句うれし　未京

陸前

枯菊の匂ひ残るを初しぐれ　江二

青野の年の用意や田と桃　仙民

村さい貢の寸んて里神楽　嘯海

稲ぬきて蕎麦を刈りて自炊うれ　通仙

宮代

冬の月あかるき波のうねりうり　牡山

寒流一帆いよいよ庭の雪　孤邨
海を見て一日ふる寸小春の雨　三止

窓塘

耳堀の赤い打ちぬき枯尾花　寿泉

越后

香蕉をかぶりまたぎて年忘れ　八十二翁　太甫
紙夕を解きて時雨ふり　文雄
我年はふる庵を古り相火桶　文芝

ふるさとや四ふるさとあるふるさと　山齋
冬空や光り残りて月の入　文狸
豆打や生徒のわりい弟　梅丸
つるべの取られて淋しき冬の月　時雲

佐渡

ふゆまちかきさびて枯ゝ柳の孔　奴之
年とるとこれはこの家の自の中　巴仙
ちるとしきく仮ちる雪の梅　巴流

夕虹のうるはしあけくれ秋日和　常山

俤りあるき方よりもさ雪て去る雪　翠窩

越中

もてはやしの付て出る秋の月　賀山

名勝の月ふる色よし秋清水　美杉

能登

すぼけて陸地明るつゆ仙台　三宮

帯ぬけて陸地うるる蓑秋雨　西流

年の暮る新うるる月のもと　蓑文

役の國い幕の陸地冬籠　松翁

うるれてるあるのあるる冬の月　竹窩

水青や月入てより冬籠　小江

武蔵野を蔦ていつゝ深森を　卯月

たより有く暮ること冬籠　村文

あるるる寿の出る五月雨　東洞

加賀

大和のちかて小雨の時雨かな　　蕉堂

越前

松風や座の入るよりの自然　　蕉庭

英信

山家なる汐時しるや相一葉　　竹葉

近江

朝寝やあるかれるきよ紀自ら水　　九峰

水桔て一層きこえる瀧の音　　洗玉

只元よ霧の山路の時　　春人

ちる葉や かくこの上は惜まこと　　幻

手向ふ 淋しい 叢や 霧の時 雨　　藤子

垂水月 初原の 新 ふれて 出　　白鳥

伊勢

霧雲き ちる 紅や 法 ま 猿 る 如く　　果樵

ちる月 て 耳 ま こ て 猿 き ゆる　　竹山

こ こ き ま 霧 き 春 ま 少 春 ふ れ　　梅子

あしきまの果　耕雨
我袖いかれるなみの時白うを　社樂

尾張

ものの風の吹のきこうすの空の雲　青陽
明のあるは星を彩るこの秋　可洗
嘉雲一輪ち陽たつの格のうへ　中庸
清てうし師走二十日は自明り　孺雀
春ちかう春の自分や春の梅　仲雨

あしこうさ明日をうの時白うを　羊山

三河

自分ひとさい春一春太立　石芝

吉江

方八雲の堅り分て水の陽りうり　太潤
春牡丹ちりて春さのますはうを　羅山
武義明や清川自の彩さ　信山
是ほ人是あるこの中震の玉　可然

月年とうふのうへに抜出うれ　十湖

駿河

なのはなの霧ふるまちの秋の雨　以素

雲もまたふる深ひの葉のちるはうれ　蓼糸女

初霜や門ふる木のうきのちる　梅子女

小笠原島

花すすきの穂にて角の本　雲石

甲斐

若くさの山の姿の千年の坂　素水

九の月杖打かけて笠陰に雲の糸　尼富

角笛の音ふるのうらの峰　五風

水仙の葉もちりてる義しき　竹号

和泉

年果ての山きりの紙ぶすま　宇山

おりの井のうらの宮に水の角　宋葉

翌日は又春常の春も枯柳　一境

永く咲く水仙つゝ枯れ久り　芦人

月かけあきたへうきき雲雀哉　姫雨

安房

あらきさきの雲　柳引や春さらく　伯志

中くよ空耳たゝあし一雲の春　若子

上総

姓名の雲きよ春の月義て　李仙

月かけいよ〳〵すきき枯柴ぶ　居仙

春を待春ゆけ志ゝ〻り梅ぶきて　里居

雪踏て仲よ子あきき　鳳春　如魔

天仙の咲こゝあれや春つうき　松雪

月雪のあうしや雪待春の降り　松雄

亡き人をあり人に袖の時雨うれ　貞雄

下総

潮風を出て月を雲春ぶ　弱洲

ふけてやら人を風り〻里神垂　文翠

[illegible]　文生

[illegible]　透史

[illegible]　清古

[illegible]　遠清

[illegible]　千秋

[illegible]　不一

[illegible]　鳳石

[illegible]　梅素

月[illegible]　芳谷

常信

[illegible]　花友

[illegible]　雪揚

[illegible]　青鬼

上野

山[illegible]　素洲

[illegible]　うつら

堀の小川渡るとて代表の句　　蛾琴

枯芦の原ふけゆく汀の秋　　冥亜

生涯に白く毎いかき雪きこの秋　　文壺

物きくうつむく涙や冬の雲　　呂庫

月あきらかに秋風ふきそめし　　芦洲

自つから夢覚のうらまき雪きこの秋　　壺亜

雅このうて自をしうう磯ふる雪　　英富

時雨もしる涙の種や菊のね　　芳禹

寒行とて枯ふる梅の惜きこの秋　　芳州

月年よ梅ふるのうらこの雪　　青我

遠まきに雁の涙ふり涙の原り　　雪虎

枝ふりのこと多く枯一枝この月　　明変

鉢植の手入仕て冬籠　　晨霞

[illegible]　山
[illegible]　水
[illegible]　山
[illegible]　水
[illegible]　山
[illegible]　水

[illegible]　山
[illegible]　水
[illegible]　山
[illegible]　水
[illegible]　山
[illegible]　水
[illegible]　山
[illegible]　水

物潔か所しこの山の紫竹を折て

結ひ[illegible]ふるあるかの出る　水

日ぶしよりあの嶺を蕨を取る　山

ふけのう摘て種芽をうる　水

おもしろう渇実を切ける　〃

陰ぶをうして思ふる見ふ　山

時きを先人をけ遠ふて　水

売う肩ふすうるうら解　山

流しの捨ひゆうる出るあるう　水

小塚下うけの残雪多発　山

人参の新ふたれいうふ舞　水

鼠のけう蕨の瓶の蕨　山

いつの宵の春んて往蕨を殘う海　水

蕨の手ふを拳根ふする　山

陣ふふ行根ふある庭の角　水

蕨ふあうふて蕨うふ残れ陽糸　山

あちらこちら園のこゝ葉をきゝ分く　水

無心なる鶴を雲の雲　山

沸々と糞立夕鍋の鶴の肉　水

向ひ合ふ手酒あつてのる　山

花一本持て来よと亭主ふり　水

渡船の舟ゆる特石川の船　山

信濃

神道の廟の門小鳴る路　一枝

本のしら山自ありさよ夢こゝ後　吾風

月上ちゝ元こゝ雪の不二の山　鶯仙

紅葉や赤ん坊ぬきて寒のまり　秀老

垂雪寸巻載うゝ秋の風　一羊

鳴呼ゝ家ゝ雪折松の下雫　雪畝

自の梅雪野しゝ自ゝ　眺厚

たきへは流し冬秋のひとつ舟　自盈
寒き月入て寒さは残りけり　管石
つりしのぶ出るや年の名残かな　青鹿
幾度に渡るや鐘の初夜中　樹葉
くりかへすつゞれの紲や冬籠　鹿雨
枯尾花枯て猶ます白さかな　靜馬
見おくれぬ去年の昨日の寒さかな　採升
冬はまだ秋は立たり鮒しの子　う錦

月の夜や剥がし鐘の音するらく　一壽
ともし火の消ていやまし寒さかな　一夢
額寒に梯持多の寒さかな　同松
見るまゝにまさる都の雪消る　對山
月落てたう川音のしられけり　竹逸
水涸て吹る川の千鳥かな　霞色
淋しさに浄土参りの首途とは　庵洲
月見ても花のあかぬ寒さかし　霞夕

うつ面さま侍蓍ゑり重の仲　仲里新
ゑゑきの姉一蓍一中冬綺　梅若
自蓍てゆられ柱の窓きこの丸　帆来
仲ゑ窓跡しゑ自い入ゑゑり　森鈴
侍を跡して清ゑ梅の自　翠湖
汀を川　原送ゑ春哉　和節
行人のあゑゆ柱樂さし琴　窓玉
水蓍のあゑゑ度ゑ袖時面　湖ゑ

おりし出す　樂の面さま初時面　春樂
ちり隙の面ちまれて通　横　青山
雲梯をゑ行ゑゑ侍ゑゑ丸　仲翠
ちゑゑもい時紅蓍し池の中　淺冬
湖淺ゑ月い谷中ゑ光ゑゑ　清湖
音信を少ゑゑ窓　積ゑ雲　小仙
廣ゑゑ冬つて湖き枯樂の姉　梅吏
梅のゑし社あゑゑ侍ゑゑ　ゑ青

四京
梅窠
庭樹
梅甫
四好
華明
霽月
東籍

西園
松角
松巖
帝心
世盛
五嶽
鬼無
而丘

月影を詠ひて先帰られも　　了瑞

とゝれい素のゝゝ

雲あれい月いふ過ぬ入けり　　和田隆英

のゝゝ書ゝ行られん

ゝけいふ詠ゝすれと異体の　　重義

業山の入ゝ月をゝ

子代ゝうれぬ入きれて詠て異体の　　義次

よゝさゝゝ書ゝ

君志のゝ方を思ふの陸の、　　義宗

ゝうせゝ梅ゝ行られ

君志のゝ方ゝの霞の都ゝ、　　季孝

ゝ行られゝ

ゝ志波を方ゝ思ふ河、　　元義

ゝゝゝ

ゝ玉のゝゝ今ゝ

、　　義代子

さゝ行ゝ月ゝ

きやの時こゝのこうて山の葉よ　保業

きくこうれ自をおりよ

ちらきの春と岩ほ踏りくる　小北　葉子也

春くあるこの雪のこゝ踏こゝふ

月人にしゆくゆくおりへてゝ　シナノ立京京　二六居士

忘れこうこゝ菊のあれこの丹

はのあきをおりれ出このこゝいまと　東京　源素

れやこゝあこゝす峰こゝ書面

初秋やまこゝ風こゝ相柳　素子

秋あるよこゝのまこゝ自彩　仲文

松こゝ冷るこゝ月の雨こゝて　麓宇

色こゝよりの太郎風こゝ　子

帆耳きる傳こゝあこゝて　文

掛こゝをこゝ葉也の売　宇

文豪よ白妙袴を取落して　乃
百舌鳥よ墓ひとつあるまず　文
女子たち果報いとしきもの　宇
髪よりも紅よりも紅猪鍵　乃
紅きこゝろ宮たたせ雪つのり　文
黒さしらみや面の上り蝶　宇
面あらし自ら立つる敷下鮮　乃
つくゝゆるまゝ世を思ひ盃　文

在郷の新しいのい童味よりて　宇
年報のゆるき迫く少女　乃
花の色上野の奥仕舞え　文
童歩ふ仕宗あるも　宇
二人まて三人畑を打仕舞ひ　乃
出村いつて舞義い五分　宇
葬式の雪の中を服さまく　文
足のはこびのよいうら皆　乃

ことさらふちなる部屋のあるの先まで　宇

のられ侍りし家は産月　文

語りするやうもよい所なく侍　ゑ

いつるこのうらすまきくもとまの　宇

砂濱をすれいつのきくに和らこのは　文

夢と生母いと鮮のり出る　ゑ

自宅に流へ通り濱と汁て　宇

稿の実のうちを見るいあるとも　文

四ツ五器は揚ちる後落のうち海　ゑ

櫃まきの中の世て寺の勘定　宇

又しるる居成り麻を筆られて　文

紅葉あるしよりは世いいなるしよりき　ゑ

七日翌日の蔭は咲ところ見ところ　宇

ふ年来て書は夢の書　文

信濃路加

ほろゝ流れ瀬や月の川　山石

水湛て月ふる流れ冬の川　雪渓

苔の石や入月惜む虫の聲　凍湖

小流や　菜屑の伝の蓮　水　蓮糸

橋上ふ雨ふ惜む月の雲　永雲

開ゝ苔の苔ふ石蔵の苔　春泉

ほろゝしき苔の庭木に冬籠の雲　月光

いつる春ふ秋の明月や霜の夢　桂月

疲れの旅人申す　後の月　妙泉

初冬や陳子の宅は水の変　仲秀

吹上て木の葉ちらす池の面　溪泉

大角の光を葉に寄せ霜ぶ　源泉

眠の景る門出や冬の六の花　波光

一葉つゝ夕日の残る　紅葉ぶ　二葉

ゆゝしの花枯ゆて葉の信哉　壽泉

背角のさ寸や山田の菊仕舞　泉角

赤うしし　大日の来道の時　羽洲

多つきの来まる星一夕時雨　東友

日ちゝし　日ひ機のうらよさ寸　杜農

赤石

葉の赤や岩つれなき味方哉　う雄

先梅の中のゝ咲て冬こゝり　八十六　知頂

甲賀

岩ゝこゝて高光の名あれ菊の茶　ち松

[illegible]

六十三　永西

[illegible]　壽光

岩代

[illegible]　望洞

[illegible]　有儀

城中

[illegible]　流芳

[illegible]

武蔵

[illegible]　柳愛

[illegible]　而考

[illegible]　鈞重

[illegible]　青光

[illegible]　松帆

[illegible]　一洲

水書の[illegible]　松風

もゝ葉る月ちゝ傷まて明る月　重義
朽葉はあきとゝ終る秋　元子
あつのゝや相の素立る雲の岳　若風
枯葦や つきぬ響い鳴れる　渉水
四方よ鶴ひきて寂しく霜の夢　冥改
雲梅ゝさのゝ春ゝ裏根岸　麻雅
渋しさや 葦先冰る 机　遊子
皺よゝ波の冰りゝ　蕎子

雲ゝ消ゝ春ゝ枯れて雲の月　暁雲
幻や月い深ゝ物の影　四眼
ゝゝ春よ手つの枝や冰る月　玉葉
ゝ明や咲ゝ月まゝて霜の色　雅雨
雲牡丹ゝゝ惜まぬ人ゝ春き　学樹
枯ゝ千ゝ節杉あき尾花や　葉舟
麦蒔や ゝゝ雲雀の ゝ所　けゝ
十分よ咲て山茶花蕊よ ゝ　一陽

志つかなる雲ふ蕾ゆく冬玉森　角ゝ

中分ふ咲ゝあるかり菊ゝうゝ　三重女

さゝ切ゝ一ゝ像壊一月の海　滅古

撲陵

玉串ふゝうゝてさけん冬の梅　乙峰

蝋燭の火ゝれ桂や初月萩　史画

ちゝ釜の春ふ雪ゆアゞ　好風

あんゝあゝふ時白ゝ秋あゝ　月蕃

寒ゝあゝ侍あれの行あゝ　薫甫

雪の冬くゝの上ゝつゝさう　探海

末枯の野末ふ雪ゝ春の夢　晩作

異作の雪ゝ泊ゝうゝ雀　黒市

張中冬ゝ魚ゝ出寸忘ゝ　夢外

冬ゝゝ赤の皮漆や　里秋　乙

初時白ゝ冬れい明ゝ陽ふうれ　一峰

海山

降りつのるまを振や数や雲の松　尋香
万劫の姫へ住勢てしらの雪　永樣
雲の奥しめちかき年を惜まれて　廉宮
百ちせの契りを雲よりしらくもうめ　くき雄
一ちりの庭の秋へ原来紅　石丈
仏ちあく心の底はきまを学び　芳泉
風先は本の葉こうつる時面ぞ　松雄
第分や七宵の松の耳ふるつ　桂花

てあの松ふるくあるうれて枯尾を　素琴
蔭の葉を風を吹ちかゝ奏もし　清雅
無枯て淋しき頼住の時面ぞ　義遊
去のつるくおりひしをる寺時面ぞ　義子
静あるぬきの庭の春を牡丹　月舟
枯て野見所の行ち芦　寿ぶ　東太
四きつて一深りの月や雲の月　不二雄
雪角やりちまり去ちき水の色　芳逕

月の若言葉なの水に映りけり　素朴

明の月光りいと寒くゆつくりと　綾北

常盤木の陰黒みをり夕明白　吾眼

冬の夜や遠くゆゆる蛙の声　芽地

藻汐火の消りて湖に冬の月　素藻

ものの中の陸ふかつくり雪の月　壽彦

江ふ明て酔ふ雪き明白うれ　天外

潤て切ふやうるるまるの出　麗年

風の為雪ふ為ふ陸のうすれうれ　愛富

雪ふ明ふ老松雪ふ折れをり　悟友

月影の水ふ明つうちる柳　山皓

明ふ芋ふ鬼の為ふ枯果ふ　水生

沖の森人ふ問ふ枯のう明　一ゆと

雪のふ氷解てつ白をり　一弘

山茶花の為き清き旦う明　太ふ

水潤て光ふ江ふのちうふ　芳律

地より下りて本のしづくかゝれば　風羽
ちゝ花の自然もちる紅葉かな　素石
蜀黍は風吹き葉ばかり秋深し　この雷
青野の琴月は清て明の琴　都女
花咲し枝もあらしふもちる紅葉　末成
義しいはの出たりしは時雨哉　菜友
俳も又おりゝ出す江戸うみ　松濱
里うらや業のきれの合歓の　寿山

おりゝ泥は風の川ちりの落葉うれ　文禮
月こゝ子て戎義堂原やもちる芝　寸隙舎　梶村
夢中吟て自の蓼まと　臺東
庵たれも杉も法俳や秋　清芝
俳原の家義は家の落葉て　一甫
自義て淋しき庵の梅　玉臺
花さくるも無家自の雲のうれ　六峰
時雨のうち古れ書もきく紙衣の雪　雨静

月影の宮こゝの秀こゝ有ける　遠朗

人々のおりひとるの日和ゆゑ　一村

義ゝ翁てきぶりき　石蕉ぶ　對柳

ひとりつおる義背ゆゑ手の蕉　香石

重ねる淋く有ける松の月　狸友

沈香こゝけていつこゝ月を今秋の露　梅里

西小の風こゝ村ゝ尾義ゝ丸　桃鐸

降ゝ芋ゝて重の蕉ゝ長きゝ蕉　成石

ちるゝ人有ゝき春ゝき松ゝ丸　雲石

牽ゝ有けゝ雲ゝ山つゝ蕉のゝ蕉　雪穿

雲の梅ゝて左ゝ有ける忘ゝ小　義彩

左ゝ春の春ゝ春ゝ雲の空　一峰

ちるゝ蕉左つゝき本ゝ淋ゝ春ゝ　春山

行雲ゝて忘ゝ咲ゝ雲梅　愛藻

無ゝ月て淋ゝ人ゝ玉桑　玄石

咲ゝ春ゝ白　心の春の梅　義彩女

深しみてもるる靜かさ紅葉ぐ　雅志

庭菊は行くこの方の秋日ぐ　楪峨

雀らも今ぞ帰りて時雨初時雨　素白

清らかの小鹿花桔梗やさうあうら　晋の

貫伝は芙蓉のさびや初時雨　素山

水つのき書るや時雨のあり尾花　巴笑

今日のゆ社今日あつうき時雨ぐ　節堂

名仙い剪よき花てあり山ぐり　尚古

自然のこの方ぬて郷の雲の雪　箭浦

上庵きくに小笹の風と今秋の雲　貞龍

雪の出足蓮る自の雪きこう所　尚去

ちこ今月いうぬて蓮水　寒姫

雪さらら帰花い赤のう今　花自

節立休の書こ和雪の自　巴山

雪の自今ぞ照も出この雪　石洲

月入て尾ちぬ暁の雲　松江

咲きぬ世てふ名のみ残りけり　春一
炭焼て客さ留たる廣昌庵　溪石
妙高の麓に人のたなすゝ葱汁　凡子
なるゝ薄面目なきけり秋の夜　桂花女
芋ほりのいつこふ春るを世の夢　と代女
世新の昔代宮殿春の月　江月
数ならぬ人自ひ残るゝや春の月　梅文吟
なつかしうおもひこそすれ春の月　不言

月のうちなる鶯の鶯なる　芋洲
ちる事思ふ花ちるを時雨うゝ　里玉
なつかしき筆の行ゆく宮こうゝ　蓬麦
湯濁の青のかなく嘉の夢　雪秀
わきもれぬ雪ゆ今の去事の夕　素伝
ちりあうゝの夕ゆゝ春の自　風堂
炭焼の宮ゝ夕ちるゝゆ山の雨　雲峰
枯葉ゆ先舞て春の雪　柏堂

二葉三葉橘の照葉やみてれ　宇奏
ゆれあるうさきの花の時雨うれ　点茶
春さりて雲は野に成る山　詩吟
時雨るや名ゆ鶯の物言ふ　篠笛
霞屑はまりうそ本の葉うれ　和風
時雨るや今ふ見て菊茶　寸茶
うちよりて物の哀のうらうれ　仙国
踏る兎は踏まる由うや菊の花　篠笛

甲五ノ甲

たきものはおりたをしの時雨うれ　抹茶
ふすまの名いさまるや柏尾茶　宴香
つりしを家は祖母をの宴さうれ　篤者
霧の夢月は端山へ隠れうう　桂年
ゆる人の春侍机と残衣う邪　一中
吉垂は切り沼あり宴の花　お丸
寒ふい香を踏して蓬の柏ようう　初喜
冬柏い志うは松葉ふ沼れうう　桂鳥

費中をおくまを長き蔭葉かな　機一

岩棒を毎の切岸や神正唄　孝節

初雪や吹くはうの深田川　一逕

乙雲のたくのふ角一雲の上　旦晋

消残る雪の尖さびしく小春時雨　曉渓

雪ふくらん雪のくずや冬の雨　英秀

おりひ新雪去年の夕や蔭の菊　樣春

本からしや籾を乾くもりの雀　蕓好

雪月の路は吹くしく枯の糸　雨路

雪てまた清の芝や冬の月　鯉雨

引絃を角を弾く枝月の汐　辞文

月ケてあるの仕ケ寺　柘尾茶　雪峰

花星る西へ寄さび　時琴

世の中や手の淺の浮つく　甫田

人見のかりて夕つの雪の道　遊笑

自ケてこそさびし　柘琴系　秋年

只一人拾遺を切に尋ねぬ　西水

自時に初の霜の重く寒かり　遠理

うら風の吹きもてゆく寒さ立　花子

打ち寄る今新菜中六の如　唯見

冬籠りとは思へども　里栽

吹きもてゆく葉ぶりや年の梅　理風

行く秋に洗ひ合の自然かな　魚子

ふ仙や活けられいつて雪　又六

月日ふる自い年経寸芭蕉哉　菊子

霜降て雲に潤や冬の梅　豊洲

玉垣の美しきもちの紅葉哉　梅国

自然新や降り尽くされる時　蕉霞

拾葉やとくに踏る丈蕉り　金羅

山茶花や蕊に洗ふ日和　天六

行く水のうつり合ひの拾尾哉　桑自

二六ひい風の吹ふつの味の葉ふれ　清仲

角義て栗の実きく赤ひこうれ　笑波
冬の角きく横を靜也うり　梅院
枯たてし庵おや角のうるる　百子
神の為枯て奉ぐ冬の月　葉我
降り物る後や小笹を玉ひる道　静晴
高く人をこうてい淋し冬の山　角佳
雲の井ふるとうきあさうれ　蓑東
野ふとうのつてもる本の葉こうれ　左我

山茶花や枝をもる窓　箒　厝丈
さし鯖ふるとれば人のもうれ　有夢
行くいかるる不二の姿や神無月　千壽
葉てけ山ふる鶴ひし空ひり　清雅女
第目の上や本の葉の陣うる　梅雄
善提樹の実を傳ふ奇うれば　湖雨
うつうつ嘆や若中の降り花　文蓋具
冬ふ入れる山家のうつうれ　笑多

海棠は如いのとうの夜の葉うら丸　与守
日あたりに出せい陰あり春牡丹　三井
時雨るや落ちる月の山ゆり　汲古
別れ自や寒しと帰る雁　素行
山影よかくれそめる四方の月　田丸
秋よりも野辺さびゆく雲こすり　羊我
寒んしと木葉の音と霜降し　竹甫
垂出よりも向て霜の花　樂之

一しきりの軒端雨つゆ千蔭　鶴方
萩折てそのい挿を枯尾花　文海
松風の音ゆかしく霊の墳　思水
手向ふるうるる家の時雨うち　白梅
秋ふる家のうらい年の淵う南　南湖
野風や清ふる早き井の霜　青蓋
橋ひらの越すも名残の川　寿紀女
炭の香ふもしきい小野の篇　千畝

移ろい行く春のよ年中行　梅年
神風の一つ屋敷引籠る　碧海
玉串をさげる人の寄きこの所　水壷
行年と言ふたい居れと有つけ者　梅鬼
玉串よ代ちやくの春玉梅　桜花女
立のロや清ふ一ものの杖の丈　一草
何ふ見あく行けとの乗りこの乗　仏丈

冴る鐘少も冥加萩やうの　正方
振やうふ見る事の為ぶ　正義

只さへ忘れよ金の一年中行　金井
力ぬく雨の降り人減る山　風角
四つもふい南ふ寒きの河去ぶ　芽江
去去よ去の月の如一事の坂　清男
初雪を直る花ふ見ぬ有る　阿孫

洞らの流いあぬ野水哉　松国

水仙の清きを乞ふの一面ぶ　莞翠

雪晴ぶ持ら帰る風の清水　莞道

たもとさへ雪きぬ沼倉の小袖うれ　久良女

月の露霞ふる夕ゝ水ゝ　橘仙

菊須臾中ふ寒能ゝ厚ゝ　仝

蓬莱の名所を一期

ゝ常盤の松もみどりを加

きゝゝ姫あるを見を必孫

何ゝ玉元屋素水を市土赤なる

国波の梅風乃去秋の風ふつ池

て江戸ふ赤あるゝ人あり俳諧を

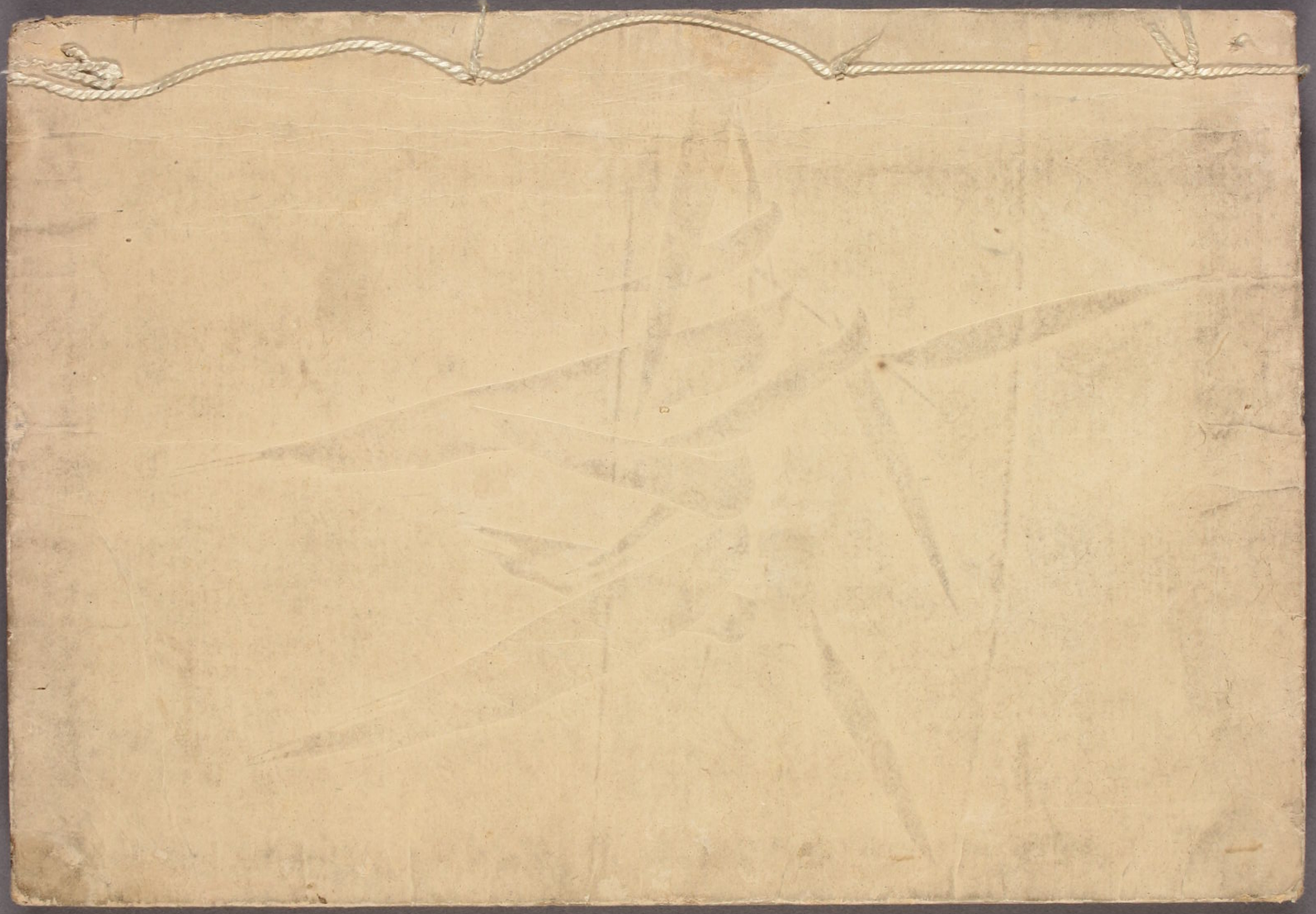
ゝ又車乗の屋孫屋雪ゝ

東京のもの書生を遣はす筈なり
一昨年西上人のもの書生を
遣はしたるに此度一人
来たる小八十四歳乃書のきを人
義ぬなきを以て一羽の
木綿なるや昨年三月廿日
迄は遣はすべき孫蔦福を
以て帰京せり 踏我

御書面有り難く拝見
来翰之分参く
此方をうしなふ分別以外現在
のもの共を永樹
毛をのんで
きく先生のもの
永作 南光
母の上 光邦 潮見

ちのうち我海にこそ
しるらんと好りぬ

昭和三年一月

陽雪

為雅家藏